

家族構造と中学生の教育アスピレーション (2)

——格差の形成メカニズム——

日本学術振興会 余田翔平

1 目的

本報告の目的は2点ある。第1の目的は、家族構造が子どもの教育アスピレーションに及ぼす影響を記述することである。家族構造 (family structure) とは、親の婚姻上の地位によって規定される、初婚世帯・ひとり親世帯・再婚世帯といった世帯形態のことを指す。第2の目的は、家族構造と子どもの教育アスピレーションとの関連を記述することを通じて、両者の関連を説明する仮説、すなわち格差が形成されるメカニズムを検証することである。

2 データと方法

使用するデータは、内閣府によって 2011 年に実施された「親と子の生活意識に関する調査」である。主たる独立変数である家族構造は以下の7カテゴリーに分類される。(1) 初婚継続世帯、(2) 離別母子世帯 (子が 0-6 歳の間離婚)、(3) 離別母子世帯 (子が 7-15 歳の間離婚)、(4) 死別母子世帯、(5) 父子世帯、(6) 再婚世帯 (親子間にステップ関係なし)、(7) 再婚世帯 (親子間にステップ関係あり)

3 結果と考察

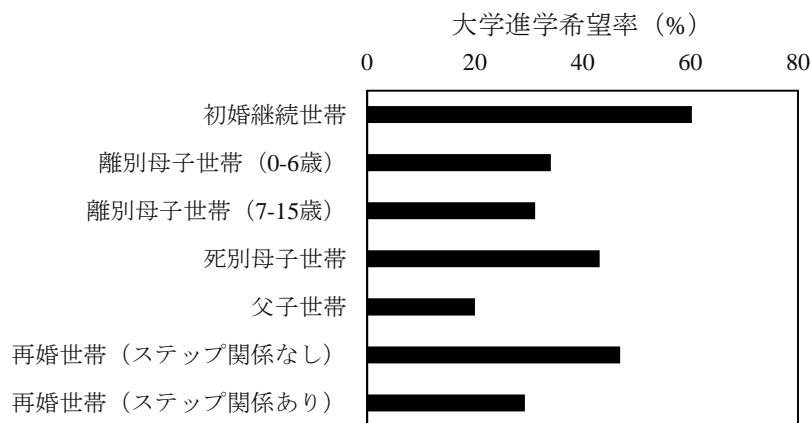


図1 家族構造別にみた中学3年生の大学進学希望率

図1は家族構造別にみた子どもの大学進学希望率である。初婚継続世帯の子どもと比較して、非初婚継続世帯の子どもは総じて大学進学希望率が低いことが分かる。非初婚継続世帯の中で差異に着目すると、死別母子世帯、そして親子間にステップ関係が存在しない再婚世帯では、子どもの大学進学希望率は比較的高いことがうかがえる。他方で、離別母子世帯や父子世帯、さらに親子がステップ関係

にある再婚世帯では、子どもの大学進学希望率は低い水準にとどまっている。

世帯の経済状態がひとり親世帯ほど悪くない再婚世帯においても子どもの大学進学希望率が低いことは興味深い。従来の家族研究では、再婚世帯における良好な親子関係を築くことの困難性が指摘されてきた(野沢 2008)。こうした知見と上記の分析結果を踏まえると、子どもの教育達成にとって、経済的資源のみならず家族関係の安定性が重要な役割を持つ可能性が示唆される。

【付記】二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「親と子の生活意識に関する調査」(内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室)の個票データの提供を受けた。また、本研究は、東京大学社会科学研究所社会調査・データアーカイブ共同利用・共同研究拠点による 2013 年度課題公募型共同研究「家庭環境と親と子の意識に関する研究」(代表・平澤和司・北海道大学教授)の一環である。